

第3回 門真市学力向上対策委員会 議事録

1. 開催日時 平成24年8月9日(木) 午後3時～4時45分
2. 会場 門真市役所 3階会議室
3. 出席委員数 10名/11名(小寺委員は、公務のため欠席)
4. 傍聴者 3名

学力向上対策委員名

- 森田 英嗣 委員(大阪教育大学教授)
- 角野 茂樹 委員(関西外国語大学教授)
- 山口 周作 委員(門真市立五月田小学校長)
- 伊藤 義昭 委員(門真市立第五中学校長)
- 小寺 弘明 委員(門真市立第二中学校教頭)
- 植原 宏仁 委員(門真市立大和田小学校教諭)
- 阪上 広太郎 委員(門真市立第七中学校教諭)
- 柏井 了子 委員(門真市PTA協議会役員)
- 川村 早余子 委員(門真市PTA協議会役員)
- 藤井 良一 委員(門真市教育委員会学校教育部長)
- 柴田 昌彦 委員(門真市教育委員会生涯学習部長)

事務局

- 苗代学校教育課長 満永学校教育課参事 岩佐学校教育課参事
- 増田地域教育文化課課長補佐

委員長：委員の皆様におかれましては、お忙しいところご参集いただきましてありがとうございます。本日は、10名の委員にご出席いただいております。委員会設置要綱第6条第2項(委員会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。)の会議の開催要件であります半数以上の出席があるということで、会議が成立することを宣言させていただきます。本日の配付資料の確認をお願いいたします。全部で4点ございます。

- ① 第3回 門真市学力向上対策委員会 会議次第
- ② 本日の座席表
- ③ 第2回 門真市学力向上対策委員会議事録
- ④ 第3回 門真市学力向上対策委員会 家庭学習の現状と課題について

最初に、第2回委員会で話し合われたことの確認をしたいと思います。配付されている議事録をご覧ください。時間を8分程度とりますので、確認をよろしく願いいたします。

委員長：「授業づくり」が前回のテーマでしたが、授業に関するスタンダードを作成していこうということが確認されました。また、先生に授業づくりに専念していただくためには、保護者の方でも宿題をしっかりと見るなどの協力が必要だ、との発言もありました。本日は、二本目の討議の柱である家庭学習について議論したいと思います。それでは、家庭学習に関する門真市の現状と課題等について、事務局からご説明をお願いします。

事務局：門真市の子どもたちの家庭学習の現状と課題についてお話をさせていただきます。お手元の資料とパワーポイントをご覧ください。この資料は、これまでの大阪府の学力・学習状況調査、あるいは全国学力・学習状況調査の児童・生徒アンケートから、経年変化と大阪府との比較を見たものでございます。これは、「学校の授業時間以外に普段1日どれぐらい勉強しますか」と聞いたものですが、門真市の場合、少しずつ「やる」という子は増えているのですが、何よりも「全くしない」という子どもが14.1%おり、府の平均が7.9%ですので、「全くしない」という子どもが多いということがわかります。中学校におきましても、いわゆる「30分未満」、「1時間未満」の子どもたちが、大阪府の平均に比べると非常に多いということになっています。

次に、普段の勉強時間と学力状況の相関関係を見てみました。これは昨年度の大阪府学力・学習状況調査の勉強時間等と、それぞれ国語A・B、算数A・Bの平均正答率との相関関係を見たものですが、やはり「3時間以上勉強する」という子どもたちと、「全くしない」という子どもたちとの間に大きな差が出ているということが言えると思います。

「土曜日や日曜日など、学校が休みの日に1日どれぐらい勉強しますか」という質問につきましても、特徴的なのが、「全くしない」という子どもが、小学生は28.4%おり、府平均よりも7ポイントほど多いという状況になっております。次に、中学校の方ですが、やはり「全くしない」と「1時間未満」というものを含めると、大阪府の平均よりも多くなっています。しっかりやっている子どもも増えているのですが、逆に1時間未満しかしないという子も増えているという状況で、二分化しつつあると言えます。

次に、「家で自分で計画を立てて勉強していますか」という質問ですが、これにつきましては、門真の子どもたちは年々「計画を立てて勉強する」になってきています。ただし、「全くしていない」、「あまりしていない」という子どもたちが、大阪府の平均に比べると多くなっています。

次に中学校でも、「計画的に勉強している」という子どもたちが徐々に増えてきております。しかしながら、やはり府との平均で比べますと、まだまだ少ないということがわかります。次は「家で学校の授業の予習をしていますか」という質問ですが、これにつきましても門真の小学生たちは、「どちらかといえばしている」、「している」という子どもが増えていきます。このように、家庭学習をやっているという子どもたちが増えているところですが、やはり大阪府の平均と比べますと、少ないという現状です。中学生におきましても、平成21年に比べ、平成23年は「予習をしています」という子どもが増えてきているのですが、大阪府の平均に比べると、若干低いということがわかります。

次に、「家で学校の授業の復習をしていますか」というところであります。これにつきましてはやはり、徐々に門真市の子どもたちは家で復習をしている子が増えてきている状況でございますが、府に比べると5ポイントほど低くなっています。中学校におきましては、逆に「している」と、あるいは「どちらかといえばしている」という生徒が大阪府の平均よりもぐっと多くなっております。

次に、「学習塾で勉強していますか」という質問ですが、これにつきましては、特に中学校3年生ですが「行っていない」という子どもが42.4%おります。これは学習塾に行っているのがよい、行っていないのはだめだということではなくて、これを見ますとやはり門真の中学生につきましては、学校以外の勉強の場は家庭しかないという子どもだが少なくないと考えられるのです。

次に、「家で学校の宿題をしていますか」という質問ですが、78.8%の小学生が「している」と答えています。これは平成20年、21年に比べると減っております。逆に、「あまりしていない」、「全くしていない」という子どもたちが、平成22年では増えています。これは大阪府の平均よりも多くなっており、ここは課題ではないかと考えております。中学校でも「している」という子どもたちが少し減っています。大阪府の平均よりも高いのですが、平成23年と比べますと、少し減っているという状況でございます。「どちらかというとしていない」、「あまりしていない」、「全くしていない」という子どもが少し増えてきているという状況がここに見受けられます。そういった宿題に取り組む姿勢と学力状況について、クロス分析をしてみますと、宿題に対して積極的に取り組む姿勢を持っている子どもと、全くしていないという子どもにつきましては、国語・算数それぞれにおきまして、平均正答率に大きな差が出ているというのが現実でございます。

こういった中から、門真市の子どもたちの家庭学習の現状を見ますと、やはり、1日当たりの学習時間が少ない、全くしないという子どもが、小中学校とも大阪府より多くなっていきます。逆に、良い面としましては、計画的に学習する子どもが徐々に増えつつあります。授業の予習をする子どもが、特に小学校で増えている。授業の復習をする子どもが増えている。復習をしている中学生は、大阪府より多い。しかしながら、宿題を全くやらない子ども、あまりしない子どもが大阪府よりも多い。特に、小学校でそれが顕著であるということが、先ほどのデータからわかります。このようなことから、家庭学習、宿題をやることが学力との相関が大きく、改善する必要があると思います。

では、次に、そういった子どもたちを指導している学校の取組を学校質問紙の結果から見てみます。まず「国語の指導として家庭学習や宿題を与えましたか」というような質問につきましては、小学校についてはほぼ横ばいなのですが、「あまり行っていない」という学校も平成23年度は見受けられます。中学校におきましても、平成23年度につきましては、「あまり行っていない」という学校が見受けられるというのが門真市の現状でございます。

次に、「算数・数学の指導として家庭学習の宿題を与えましたか」という質問ですが、これ

につきましては、門真市は、「よく行った」、「どちらかというに行った」と答えている学校が多く「あまり行っていない」という小学校はありません。ただし、中学校では、「あまり行っていない」というところもございます。

次に、「保護者に対して児童・生徒の家庭学習を促すように働きかけを行っていますか」という質問ですが、これにつきましては、平成23年度は、「よく行った」という学校もあれば、「あまり行っていない」という学校も出てきているという状況です。

中学校におきましては、どの学校も「どちらかというに行った」が100%ということで、平成20年、21年に「行った」という学校があるのですが、20年度は「どちらかといえば行った」が100%になっているというのが現状であります。大阪府では「全く行っていない」と学校がありますが、門真市の中学校はございません。

次に、「学校として宿題の出し方について統一して取り組んだか」という質問ですが、これは平成23年度以外の年度には、こういう質問は出ておりません。23年度で比較しますと、「よく行った」という学校が、大阪府平均より少し低くなっています。「全く行っていない」という学校も見られるということがございます。これは小学校中学校ともに同じでございます。ただ、中学校の場合は、「よく行った」、「どちらかというに行った」というところは、大阪府の平均よりもはるかに高いというところがございます。

「学校として、児童生徒に対して家庭での学習方法について具体的に指導しましたか」ということですが、門真市の小学校の場合は28.1%が「あまり行っていない」というところがございます。中学校につきましては、「よく行った」、「どちらかというに行った」というもの、その2つで100%ということになっております。

こうしたものから見ますと、門真の学校の宿題にかかわる現状としましては、国語の指導として、宿題を与えている学校が小中学校ともに大阪府よりも多くなっています。数学の指導として、宿題を与えている中学校は、大阪府よりも多い。保護者に対して家庭学習を働きかけている学校の割合も大阪府よりも多い。学校として宿題の出し方を統一して取り組んでいる小学校は、大阪府よりも少ないのですが、中学校は大阪府よりも多くなっています。学校として児童に家庭学習での学習方法について具体的に指導した小学校の割合は大阪府よりも少ないのですが、中学校の割合は大阪府よりも多い。ただし、学校間で、宿題の出し方についてばらつきがあるという現状もありました。

そこで、課題としては、やはり保護者の方々に対して家庭学習を促すよう一層働きかけていくことが挙げられると思います。市内の学校間でのばらつきをなくしていくことや宿題の出し方について、学校として統一していく必要があるのではないかと思います。さらに、学校として、児童の家庭学習の学習方法について具体的に指導していくことや宿題を全くやらない子どもが少なくない現状を改善していくことも大切であると考えます。

それから、第1回の委員会で、委員の方から「中学校の家庭学習ノートは、宿題の時間の確保としては効果があるのだが、その内容、つまり質についても考えなければならないのではないか。」という貴重な提言がありました。そこで、中学校の家庭学習ノートについて

も内容を考えることが必要ではないかということも課題として挙げさせていただきます。
以上、簡単ですが事務局からの説明とさせていただきます。

委員長:事務局から現状のデータと課題の提示を行っていただきましたが、ご質問はありませんか。
それでは、ただいまの説明をもとにして、今後は市としてどのような施策をとっていくことが必要かということについて話し合いたいと思います。

説明にもありましたように、家庭学習の時間が多いということと、学力の状況との間には、大きな相関があるということが見てとれたと思います。特に、宿題に取り組む姿勢と学力状況には強い相関がある。中学校には特に顕著にそれが見える。つまり、宿題をはじめとした家庭学習をきちんとやっていくことが、学力向上につながるというような関係性があるということが示唆されたと思います。どの子どもも家庭学習、特に宿題をきちんとするようにするためには、教育委員会、学校、保護者、PTAなどが、どのように連携し、どのような取組を行っていくのが今後重要になってくるかということを話し合いたいと思います。

委員:家庭学習がきちんとなされていれば、成果は必ず出るということがはっきりとあらわれていますね。また、宿題の取組について見てみますと、門真市の場合は、小中学校とも、子どもに対する具体的な指導、保護者に対するアプローチは、府よりも少し良いようですね。それなのに成果としては出ていないという状況があります。「家庭学習イコール宿題」という形で論議されていますが、現実については、事務局としてはどのように把握しているのでしょうか。

事務局:宿題について、様々に取り組んでいただいているという部分では、門真市は確かによくやっているとさせていただきます。問題としましては、家庭学習の時間の少なさや宿題を全くやらない、あるいはやれないのかもしれませんが、そういった子どもたちが、大阪府の平均に比べますとはるかに高いのです。こうした現状もやはり考えていく必要があるだろうと思います。家庭学習をどんどん出していくのは大事ですが、そのような子どもたちが、どのように学校以外で学べるようになるのか、そこも大きなポイントであろうかと考えております。

委員長:家庭学習と宿題との関係ですが、これは、「家庭学習イコール宿題でない」という理解でいいのでしょうか。

事務局:宿題は、学校が必ずやりましょうというように出すものです。家庭学習は、もう少し幅の広いものであって、宿題以外にも、例えば、中学校では家庭学習ノートというものがあります。小学校でもそういった形で、自由勉強というような形で出している学校もあります。宿題をもう幅広くとらえたものが家庭学習でないかと考えております。

委員長:ほかに質問などはありませんか。

委員:少し違う目でみると、学校現場では、宿題で定着させることに依存した授業をしているように思います。資料を見ると、家庭学習や宿題と学力の定着は、やはり大きく関係しているのだなと感じました。教師側としては、家庭学習も大事でしょうが、やはり授業で勝負したいと思っている部分があります。家庭学習や宿題に依存した授業になってないか、授

業で子どもの興味を引くことができたなら学力はつくのではないかというようなところも考えたいと思います。

委員長：確かに、学校でやることによって学力を上げていくのが基本ですので、家庭に依存するという感じになると、なかなか難しいと思います。データが示すところによると、家庭学習や宿題をする子どもの学力は高めに出ています。これに因果関係があるかどうかについては、単純に考えるのは難しいところもあります。宿題を出しても、難しくてできない。つまり、学力が十分でないために宿題がうまくいかないというようなことも背景にあるのかもしれない。宿題を十分にやるような条件が家で整っていないとかいうようなことも、同時に考えていく必要があるのではないかと思います。

委員：今、先生の立場から、「授業で勝負したい。」とおっしゃったのですが、1回目の委員会で児童・生徒が自主的に取り組むことが少なく、言われたことしかしない、というお話がありました。やはり、毎日の反復練習が大事だと思います。強制的にそういう時間をつくってあげることによって、学力の向上につながるのだと思います。今回は学力向上の対策ですので、その面からいうと、やはり宿題をする時間をつくってあげることが重要だと思います。

委員：私は専門が数学でして、授業を教育課程どおりに進めようと思えば、演習する時間がかなり少なくなります。けれども、授業でわからせて授業で勝負しないといけないというところで、標準以上に説明に時間を費やしていました。わからせるために説明の時間をとりましたが、「先生、くどい。」といわれました。家に持って帰ってもできない、と考えられたので、やはり説明の時間をまたとらざるを得ない。そうすると、演習する時間を保障できず、必ず宿題にし、それが授業の復習となるという考え方でやってきました。本校においても、家で勉強しない子が13%もいて、ちょっとショックでした。各担任が、家庭学習のチェックを一生懸命やっているのに、時間がゼロという子がクラスに4、5人いるわけです。アンケートを取ることによって、データがはっきりと我々に突きつけられるわけです。どれだけ演習や、理解させるための時間がとれるのかはわかりません。少人数でグループワークをさせてみると、班の中で、わかっている子どもがわからない子どもに教えるわけですね。教えるのは難しいですが、教えることによって、わかっている子どもの理解度が深まるという考え方もあります。そういう時間をできるだけばしていければと考えています。また家庭学習をお母さんが横で見たりしているご家庭では効果があったりします。

委員長：学校で演習の時間が十分にとれるという場合ばかりではないし、そうした場合、どうしても家庭での宿題という形で出して補っていくことが必要になってきます。その時に、家庭の方で条件が整っているところと、そうでないところでは、随分差が出てきてしまいます。できるだけ家庭に協力してもらいながら、その差がつかないようにしていくことが大事なのではないかというお話だったと思います。

家庭学習がそういう意味で重要だというようなメッセージを、PTAの総会等で説明する

とか、文書を配るなどしている学校はあるのでしょうか。

委員：本校では、学校だよりや学年だより、学級通信で喚起しています。「一日1ページを目標にしましょう」といって、中身の濃いものがあれば褒めて紹介していくような工夫は、どの学校でもやっていると思います。

委員長：これまでも学校からはメッセージを出してきているということですね。

副委員長：宿題や家庭学習を、学校の教師の側から見た場合、子どもの側から見た場合、保護者から見た場合、どう見るのかということ整理した方がよいと思います。学校の教師は、計画的に宿題を出しているのかどうか。これは教師に対する厳しい指摘で、小学校の教師でも、計算ドリルと漢字ドリルの宿題を当たり前のようにやっています。子どもは、作業をさせられているというとらまえ方がありますよね。教師は、今日の授業で何を意図して、子どもに何をさせたいのか。子どもが家庭学習や宿題をする時というのは、もう一つの自己評価の場だと思っています。学んだことや、何ができて何ができていないかということ、もう一度自己評価をする場なのです。もっと伸びようとする子どもは、できていないところ、あるいは、さらに難問を、ということで挑戦していくのが自由学習になっていきます。これらを合わせて家庭学習なのかなと考えています。家庭学習で「自由帳に何をやってもいいよ。」という、まじめな子どもは一生懸命やります。そのことが、今その子どもにとって、どんなメリットがあるかといったときに、厳しく言えばピントがはずれてしまっていることもあるのです。そういう意味では、子どもが今学んでいることの延長線上に、何かを学び取りたいから、新たな勉強を始めるのだと思います。

保護者から見た場合に、考えなければいけないのは、自分の住んでいる住環境がどうなのかということです。家庭での生活習慣はどうなのかということが、子どもの学習習慣や学習環境に大きな影響を与えていると思います。大阪府では、過去に7回ほど学力実態調査をやっていますが、ほとんど同じ分析になっています。

例えば、団地一戸で3DKの場合には、おそらく1Dは、学習環境に位置しない場所だと思うのです。後の2つの部屋を「子どもたちの学習の部屋に」と言っても、片方でテレビがガンガンついていて、自分だけ勉強するかというと、無理がありますね。子どもたちが、今から勉強をやるかという時に、オリンピックのテレビをやっていたら、とてもじゃないけれど、勉強をする気にはなれませんよね。保護者は、本当にその気になれば、環境を整えないと、と思いますね。だから、子どもと保護者と教師側が、何を意図して、それに向き合うのかということ考えないといけないですね。

また、宿題を出しやすい教科、出しにくい教科があります。出しにくい教科が好きな子どももいるのです。社会科の宿題はあまり出ないですが、社会科から伸びて、他の教科を上げていく子どもも山ほどいるのです。週に1時間か2時間の技術家庭科が大好きな子がいますが、宿題はなかなか出ないでしょう。でも、子どもにとったら、そこから伸びる子どももいます。だから、主要教科や学力調査の対象教科にこだわる必要はないと思います。子どもが自ら、何ができていて、何ができていないかをチェックできるようにする。「でき

ているな。明日もがんばろうか。」といった意味合いを持つことができないかなと思います。そのような観点を入れたら、先ほどの発言にもあったように、授業との関連について、ある程度必要性が出てくるのではないかと思います。

委員長：これまで学校はいろいろなメッセージを出してきたわけですがけれども、もう少し戦略的な宿題の出し方も必要なのではないかというお話だったと思います。子どもが宿題、家庭学習がしやすい家庭環境とはどういうものなのかを、実際に考えてもらうような伝え方もありかなというお話だったと思いますね。今までとはちょっと違うような戦略を持った宿題の出し方、そして家庭の協力を得るといようなやり方があるうではないのか。確かに、好きな教科であれば、宿題に打ち込みやすいところがあるわけですね。それをやっているうちに、宿題の習慣がついてくるということも、実際にはあると思いますね。そういう子ども一人ひとりの様子にも配慮しながら、宿題の習慣を形成していくような、長い目の戦略というのが必要かもしれませんね。

委員：戦略的な質の問題というのは、学校として考えないといけないし、宿題を学級担任の先生に100%お任せというのでは、取組としては少し弱いのかなと思っています。今後、市として、学校として、宿題のあり方やとらえ方、質の問題を論議しなければならないと思います。

事務局から、「宿題をやらない」との指摘がありましたが、例えば、宿題をしてくる子どもの率を上げる、宿題に取り組まない子どもをなくすという方法で、感じていることがあります。

1つは、「放課後児童クラブ」です。門真の場合は10年ぐらい前に始まったと思います。今現在、1年生だけで54名中30名ぐらいの子どもが、放課後児童クラブに行くわけですね。児童クラブでは、宿題が終わったら他の活動をしますので、30名の子どもたちは宿題を必ずやるのです。1年生担任に「宿題をやってこない子どもはいるのか。」と聞きますと、全員やってくるとのことでしたので、「それはすごいね。」と言いました。もう1つは、「まなび舎Kids」です。これも市の施策で、水曜日の1回だけ行っています。参加学年は2年から6年で、4時半位までやるのです。終わった学年から、そこに自由参加して帰っていくのですが、本校では参加者が多いです。40～50名ぐらいですね。図書室も満杯になって、わいわいしながら勉強をしております。PTA、学校支援コーディネーターを中心とした地域の方々に、4、5名来ていただいて運営しております。ここでも、参加した子どもは、宿題をして帰っていきます。自然と、そこに参加したら宿題をするというようになります。私はすごくいいなと思っています。家に帰った時に、自分の部屋を持っている子どもは少ないです。本校の子どもも、食事をするところで、一緒に勉強しているという子どもがほとんどです。そこにはもちろんテレビもあります。そういう子どもがほとんどなので、宿題をもって家に帰って、果たしてできるのかと言えば、なかなかできにくいと思います。そういう意味では、2つの事業の効果は、大きいのではないかと考えております。2年から6年の状況はどうなのかと聞きましたら、宿題を全然しないという子はいないで

す。なかなかやってこない子どもが、クラスに2、3名いるのですが、そこに力を入れて取り組んでいるという話でした。子どもたちが、授業が終わってから家に帰るまでの間に、学習する空間や時間が確保できたら、大きな成果があるのではないかということを感じました。

委員：資料を見て、予習・復習をしている子どもの割合が府の平均よりも多い、という点に驚きました。「門真の子どももこれだけやっているのだ、見直してあげないと。」と感じました。私の子どもが通っている小学校でも、家庭学習はこのような内容で、学年×10分+αやりましょと、学年毎にプリントが配付され、懇談等で先生から毎回お話があります。ただ、そこに食いついてくる保護者が、割合としてどの位いるかはわかりません。

P T A便りを発行する時には、P T Aの活動や講演の内容等をその都度出すようにしています。出しながらも、何人の親が読んでくれているのかな、というのが正直なところです。でも実際に反応もあるので、見ていないわけではないのですね。だから、家庭学習に関しても、毎回学校側から打ち出すことで、やっぱりうちも考えないといけないのかなという保護者が出てくるのかなと思います。

私は、まなび舎にもかかわっています。保護者の方にもたまに声をかけるのですが、「私は教えられない。」という方が多いのですね。それは家庭学習でも同じです。子どもたちが学習するのを、親が横で見てやることは、多分門真では難しいと思うのです。中には、みてやれる親もいるとは思いますが、共働きもしていますから…。

私は、サタスタやまなび舎の子どもたちにも言うのですが…。「例えば、なりたい職業があって、その教科書を読んで勉強する時、小中学校で勉強して100の漢字が読めるようになった子と、勉強しなくて10しか読めない子では、スタートが違うよ。こつこつやっていたら、同じところからスタートできるよ。その差は、小中学校で自分たちがどれだけやるかだよ、だから勉強するのだよ。」と言います。なぜ勉強をしないといけないのか、勉強すると将来がどうなのかというところを示してやると、「勉強しようかな」という気になるでしょう。親にしても、自分は勉強しなかったけれど、子どもには勉強させた方がやっぱりいいのかな、など思ってくれたらいいなと思います。保護者へのアプローチは、環境から入っていく方が効果があるのではないかと思います。

委員：場と環境の提供と、とにかく紙面的なものを何か出してほしいという思いがあります。例えば、市教委がこの場でスタンダードをつくるとか、保護者にはこの資料で相関関係があって、勉強する意味のこととか、家庭学習はこうだ、とか…。我々は年度当初の家庭訪問で、保護者に話したり、学級通信や学年通信で出したりしますが、もう1つ何かあればいいかなと思います。

副委員長：例えば、「家庭では1日2時間はテレビをつけません」というようなことが家庭の方でもやっていると、子どもも変わると思います。子どもに対して指導力の強いのは学校です。保護者と連携しながら、ある日突然にそういうふうにし始めると、子どもは「これから変わるのだ。」というようになるでしょう。特に小学生は、変えてしまった方がいいと思いま

す。2時間テレビを我慢する。親が我慢すると、子どもも「あれ？」と思います。親がいつもビールを飲みながら野球を見ていると、子どもは勉強しませんよね。現場の先生で、宿題の出し方がうまい先生もいます。それをみんなで吸い上げて広げていくとよいでしょう。子どもを上手にその気にさせて、勉強や宿題をさせる先生がいますが、特に小学校は、個人企業的な部分があるので、そこで止まってしまうこともあるでしょう。しかし、門真全域の中で見ていけば、とてもおもしろい取組をやっている先生がいると思います。子どもを上手にその気にさせている先生方が。中学生でも、中1からやっていると、そういうレベルに乗ってきます。今の中2、中3の子どもは、来年になると入試の問題があるので、なかなかそのルールに乗ることは難しいかもしれませんが、今の中1の子どもが、小学校の段階から変化を与えられたら、その流れの中で動き始めると思います。

子どもが小さい時は、御飯を食べる時にはテレビをつけないという家庭が多いはずですが。ところがだいたい小学校高学年くらいからテレビがつき始めています。子どもがこの番組を見ていかないと、明日学校についていけない、ということもあるので、親が負け始めているというのがあるのかなと思います。わかりやすいうち出しとしては、「何時から何時の2時間はテレビはつけません」というのを各家庭で決める。単純な形からの発想ですが、案外それは小さい子どもには通用します。

委員：一つの学校も個人企業みたいなもので、それが各クラス、各教科担当、さらに個人になっているわけで、宿題を出す方には、ばらつきがあるのが現状です。統一したりするのは、なかなか難しいという現状があります。市内の中学校では、自主学习ノートのようなものを全校でやっています。私がぜひ提案したいのが、その自主学习ノートのやり方だけでも統一できないかということです。今日もノートを持ってきました。これは本校の自主学习ノートです。冊子を作ってやっているのは、本校だけかなと思います。本校では、1学期のはじめにこのノートを配っています。1日1ページ学習したら、60日で終わります。子どもたちは大体2、3ページやってきますから、約1カ月半でなくなります。2冊目以降は自分で買いなさい、と言っています。良かったら、こういうものを統一していただけたら、と思います。

委員：そのノートには、先生が一言書く欄もあるのですか。

委員：あります。どうぞごらんください。右下が、先生のコメント欄です。中学校の教師は、大体1日平均2時間程度空き時間がありますが、担任はこれを見るのに1時間かかりますね。

委員：自主学习ノートについては、実は賛否両論の意見が寄せられていることもあります。今は、肯定的な意見が多かったので、逆の側面での意見を紹介したいと思います。1つは学校の中で統一して「〇ページやっておいで。」と、最低限のことを言われる先生もいれば、例えばクラブで「うちのクラブは、毎日3ページやっておいで。」というようなことを言われる先生もおられます。そうなってくると、本来自分がやりたい勉強や、自分が社会のワークブックを使って勉強していききたいと思うところが、そちらに時間をとられてできないのだ、という意見が寄せられたこともあります。

それから、1回目の委員会でも意見が出ましたが、「これが本当に学力向上につながっているの？」というような疑問を持っておられる方もおられます。このことは、最初に議論されていた、様々な子どもたちがいて、その宿題がフィットしているのか。最初にお話になられたように、家庭学習というのは要るでしょう。ただそれは、授業の補完だったり、授業の定着だったり、授業の発展だったりと様々な役割を持っています。けれども、その家庭学習というやり方で、それが果たしてカバーできているのか、というのは1つ側面としてあるわけです。だから個々の子どもに対応するようなことが、なかなか時間的にも難しいというのは、重々わかっているのですが、そういう考えもあります。もう1つは、去年、小学校で感じたのですが、算数の授業が終わったあと、子どもが教室から出てこないことがありました。何をしているのかなと思ったら、一生懸命問題を解いているのです。「なんで遊びに行かないの。」ときくと「これをやりたいから。」と言ってやっている子もいました。その授業は、多分すばらしい授業なのだろうと思うのですが、そういう、子ども達がやりたいと思える宿題、これも考えていく必要があると思います。もう1つは、子どもの様々なニーズということである、家庭環境がどうしようもない、いう子どももいるでしょう。その子どもに対する施策ということで、市教委としてもやっていることがありますので、まとめて話してください。

委員長：では、事務局よりご説明をお願いします。

事務局：家庭学習習慣の定着に向けて、門真市としても施策を行っております。まなび舎 Youth 事業、かどま土曜自学自習教室サタスタ事業、まなび舎 Kids 事業でございまして、学校教育課及び地域教育文化課、学校教育課、生涯学習部、教育委員会が一丸となって、家庭学習の定着を行っています。その成果と課題について簡単にご説明を申し上げます。まず、まなび舎 Youth という事業でございまして、これは対象が中学生でございます。市内全中学校6校で実施しております。1校平均年間約19～20回程度行っております。週に1回程度、火曜日あるいは水曜日2時間程度行っております。参加人数は1校平均の延べ人数が年間で265名程度です。自ら進んで学習を行える生徒の育成や、基礎・基本の学力の定着が目的でございます。生徒は『学習支援ソフト』にあるプリントを自分で選んで印刷して、自主的に取り組みます。生徒の学力向上に寄与できる大学生や地域人材を学習支援アドバイザーとして配置し、生徒に学習機会を提供しています。この事業は平成20年度に始まりましたが、当時は2校での実施でした。平成22年度より全校で実施しております。成果としましては、参加した生徒が自ら課題を見つけて、自主的に学習するようになったということです。また、3年生の中には部活動を引退し、受験体制に入ると、毎回参加する生徒もいました。教員と学習アドバイザーの間で学習の様子について情報交換ができたということも聞いております。そうしたことをとおして、生徒と学習支援アドバイザーの信頼関係が構築されています。課題としましては、学習支援アドバイザーの確保が難しいことです。学校行事やクラブ活動との兼ね合いで参加することができない生徒がいることも課題でございます。

事務局:生涯学習部地域教育文化課の増田と申します。まなび舎Kids とサタスタ事業につきまして、お時間をちょうだいして説明させていただきます。サタスタの24年度実施校数は20校。全小・中学校で実施しております。まなび舎Kidsの方につきましては、小学校のうち4校が平成24年度の実施校となっております。実施回数ですが、サタスタの方が1校平均31回、まなび舎Kidsの方は、1校平均が33回となっております。まなび舎Kidsの23年度につきましては、東小学校はプレ開催という形でいたしましたので、実際には年間当初は3校を立てたという形になります。実施時間ですが、サタスタの方は、土曜日の午前中2時間、まなび舎Kidsにつきましては、今年度は水曜日の放課後2時間となっております。登録人数1校当たりの平均ですが、サタスタは昨年度26名、本年度につきましては64名、ただし、本校では、自由出席という形にしておりますので、この64名のところからは除いております。ちなみに平均出席者数は、40名程度となっております。続きまして、サタスタとまなび舎Kidsの学習内容についてでございます。サタスタは小学校ではプリント学習、今年度は大阪府教育センターの国語、算数等の教材等を使っております。そして、宿題も持ってきています。中学校ですが、プリント学習及び宿題で、小学校と同じような形でございます。まなび舎Kidsの学習内容ですが、プリント学習及び宿題をして、終わった子どもたちは、図書室にある本も読んでいるというような形がございます。運営ですが、サタスタの方は、地域の大学生、退職教員等による学習アドバイザーを各校に配置し、児童生徒の学習を支援する。また運営を円滑に行うため、地域人材による監理員を配置する。学校支援コーディネーターは、学校地域行政とのコーディネーター役を担い、本事業の運営を支援するという形です。

まなび舎Kidsでございます。まなび舎Kidsは、学生、大学生、退職教員等の学習アドバイザーを配置する。そして、学習アドバイザーが、具体的アドバイスや、算数のプリント等による教科学習の支援をする。そして子どもの安全管理面に配慮するため監理員を配置する。そして、放課後子ども教室の開催です。こちらは、子どもの安全管理に配慮するため、監理員を配置する。社会教育施設の門真市青少年活動センターにおいて実施しております。放課後の週1回から2回、継続的に実施しております。この放課後子ども教室につきましては、先ほど、まなび舎Kidsは小学校4校であると紹介しましたが、それとは別に、沖小学校の隣にある青少年活動センターで実施しております。成果でございますが、サタスタの方は、平成24年度より事業を開始し、今年度4年目を迎える地域及び学校に、事業が浸透したのではないかと感じます。また対象学年の拡語活動を取り入れるような学校があるなど、新たな取を地域主体で実施・展開しております。人材につきましても、地域で地域の学生を見つけて確保するなど、「地域の子どもは地域で育てる」という意識が高まってきているのではないかと感じます。まなび舎Kidsについてです。平成23年度と比べ、1校当たりの登録人数が14名も増加したということが大きな成果であると思われます。また、東小学校におきましては、今年の3月にプレ開催を行い、今年度より正式開催を行うことができました。実施範囲内で当日の宿題は必ず完成するというのを当日の課

題としております。

今回は2つの事業の課題についてでございます。サタスタですが、学校によって児童生徒の参加人数にばらつきがございます。2時間という実施時間が小学校にとっては長く、集中力が持続しないことがあります。それにより騒がしくなってしまうということがあります。あとは、学習アドバイザーの確保、そして、学習アドバイザーの急な欠席が生じたときの対応、教材やプリント等の選択充実が課題でございます。まなび舎Kidsの方ですが、学習アドバイザーをはじめとする人材の不足により、実施校が滞っている状態でございます。特に、こちらは平日に実施しますので、学習アドバイザーを大学で確保するとなると、かなり厳しい状況がございます。サタスタと同様に、2時間という実施時間が小学生にとっては長く、集中力が持続しないことがございます。そして、教材プリント等の選択や教材等の充実、そして、実施教室の調整や確保、参加児童が多い場合と、こちらは平日の放課後なので、実施教室の調整等が課題になってきます。

以上でございます。

委員長：ただいまのご説明について、もしご質問があればまず伺いたいと思います。

委員：2つの事業につきまして、個人的に意見として申し上げたいと思います。少し怒られるかもしれませんが…。サタスタとまなび舎Kidsですと、個人的には、まなび舎Kidsの効果は大であると思っております。どちらも週1回です。サタスタの対応をされている委員さんがいらっしゃるのに、効果がないとは言いにくいのですが…。土曜日の開催というのは、子どもにとっての負担であるし、保護者にとっても大変であります。したがって、参加人数が非常に少ないということになるのだと思います。別にやめろというわけではないのですが、効果の面でいえば、まなび舎Kidsかなあと思います。そうしますと、まなび舎Kidsをいかに充実させていくのかということが、門真市の学力向上においては、非常に大きなポイントであるだろうと思っております。そこで、1つ重要になるのが、学習アドバイザーの確保ですね。これを確保しなければならぬと考えているところに、大きな障壁があると思っております。正規の授業が終わって家に帰る、その間の1時間か2時間の間。そこに宿題をやるという空間と時間、環境を与えたけれど、どう保障してあげるのか、それでいいと思うのですよ。学習アドバイザーを置いておいて、安全管理ということだけに視点を置いた運営をすると、週1回の運営を、週2回、3回に増やせるのではないかと。「放課後児童クラブ」の取組と合体しますと、大きく参加人数が増えるわけです。児童クラブの参加というのは、各学校とも100名ぐらいでしょう。私立の幼稚園等がたくさんの予算を見ながら運営するわけですから、場所も空間もあります。まなび舎は、工夫次第では100名、200名、300名と効果があれば、全児童が参加するということも考えられないことはないわけでしょう。

しかし、サタスタはそこまで発展するとは考えられませんね。予算も大きいですし、子どもも参加しにくいです。だから私は、怒られるかもわからないと思いながらも御意見を申し上げますが、まなび舎Kidsを充実していく方向でお願いしたいと思います。まなび舎

Kids にシフトしていただければ、と個人的には思っております。

委員：私も同感です。サスタはちょっと難しいですね、中学生には、無理があります。やはり、まなび舎の方が充実感を感じるのではないかと思います。毎日平日なら、もともと学校にいますし。勉強を教えてくれるアドバイザーですが、これはバイトのように募集はできないのでしょうか。例えば、近隣の大学の学生課などに、そういう協力を得ているとか、そこに募集に行っているとかはされているのでしょうか。

委員：サスタですが、近隣の大学にお願いにしております。これからは大学連携もしていこうと考えていますが、大学から来てもらっているところもありますし、地域で地元の学生さんを見つけていただいているところもあります。一つには、学校支援地域本部の皆さんの協力と、そういう大学の意欲ある学生さんが、意欲がある児童や生徒のために官学協働でやっていただいている事業であると認識しています。

土曜日だからこそ、地域の方の「学校の役に立ったらいいな」という思いがあらわれて、サスタもやってきているわけです。残念ながら、まなび舎 Kids については、実施校も少ないですし、夕方ということで学生の確保や保護者の方の協力も難しいです。実施されているところでは、地域の方々が協力的なのでなし得ているということです。せっかく地域の支援をいただく形でやっていますので、学校、保護者・家庭、地域の三者協働で、と思います。

学力向上に絞ると、学校と保護者、PTA も関連してくるのですが、PTA は学校ごとの保護者と教師の組織だと思うのです。組織で何を協議するかということ、やはり子どものことであります。PTA の目的の一つは、家庭教育の振興であり、そのために役員の方もニュース等を発行していただいて、皆さんに呼びかけていただいています。けれども、依存ばかりでは、協働もできません。やはり、共通認識のもとに、連携してやるのが筋なのかなという気がします。

先ほど、宿題は学校の教育の延長の部分でもあり、ただ単に家庭に依存するだけのものでもないという意見がありました。ちょっと言いにくいのですが、学校もまなび舎 Kids をするとき、もうちょっと関心持っていただくようにしていただけたらと思います。実際先生も忙しいので、なかなか手をとれないとは思いますが…。家でなかなか勉強する環境はつukれないという子どものために、PTA、とりわけ児童生徒の保護者に協力していただくことがあるならば、先生も「もうちょっとこういうことでお願いしますよ。」と、お互い認識を深めていくのが大事であり、それが連携なのかなと思います。

委員：先生も協力を、とおっしゃいましたが、会議が入るのです。本校でもまなび舎 Youth を、部活動もある中で、地域の方や学生などをお願いしてやっています。会議と並行して、その方に来ていただいています。私も会議がなければ様子を見にいきます。会議を精選していこうとはしていますが、毎週水曜日は必ず会議が入ってきます。先生方が物理的に行けない部分もあるのだということをご理解いただきたいと思います。

委員：今、会議と並行してされているのはわかっております。常に見に行ってくださいというこ

とを申し上げているわけではありません。PTAの会議などがあると思います。そういう場で色々お話していただいて、先生とPTAの方、保護者の方で、ニュースなどを出して学校ごとに工夫をしていただく。共通認識の上で、話しあったことを、その場で還元できるような形にさせていただいたら…という意味で申し上げました。

副委員長：まなび舎 Kids と Youth の事業は、私は府教委小中学校課長の時につくった事業です。平成20年の秋からスタートしましたが、いきなりではまず無理だということで、補正予算も組まず、21年度からスタートしていただきました。今は、約8割の小中学校で、各市町村の単費で継続してやっています。ただ、まなび舎 Kids は、安全管理の問題もあって、社会教育のエリアになっています。もう一つの Youth は学校教育ということで、わかれてしまっているのですね。しかし、心は基本的には一緒なのです。予算の仕組み上、国の方が、地域本部事業の流れの中の予算が来ているので、どうしても学校教育と分かれてしまいました。ただ根底にあるのは、学校支援地域本部事業です。事業をやる時に、各学校現場に回って事情をお聴きしたところ、特に中学校は、クラブ活動があるから、とてもじゃないけど無理だというのがほとんどだったのです。ならば、斜めの関係でいこうと。先生と子どもは、縦の関係ですよね。地域の青年とは斜めの関係だし、地域のおじさん、おばさんとも斜めの関係です。こちらの方が、子どもたちにとってもやりやすいのではないかと、それが学校支援地域本部事業の本質のねらいなのです。団塊の世代がたくさん出てくる。団塊の世代におんぶにだっこという発想から、団塊の世代としての社会教育の充実で、自分の自己実現をしていく場面を、学校教育というフィールドの中に見出そうという都合のいい考え方ですけれど…。どちらかという、先生から離して、斜めの関係で勝負しようというような発想も出ましたので、学校側は学校側で本当にありがたいという思いを持っているだろうし、地域の方は地域の方で、斜めの関係で行こうかと。その間をフォローしていくのが、地元の学生だと思うのですね。大学は、掲示板に張るだけなので、申し訳ないけれども学生は、情報を知りません。私が受け持っている門真出身の学生に聞くと、知らないと言っていました。秋学期決まったら、本人に言うておきます。

委員：私は、サタスタとまなび舎の立ち上げの時から、スタッフとしてかかわってきました。多分皆さんもご存じないこともあるかと思うので、御報告をかねて発言します。サタスタとまなび舎は、全く別物なのかなという認識は持っています。まなび舎に関しては、学校が終わってその延長にあるので、子どもたちの人数も集めやすいです。サタスタは土曜日ですので、参加人数が少ないです。私の地域の学校では、サタスタは4～6年に募集をかけていますが、小さい学校なので人数もすごく少ないのです。習い事をしている等の理由で来ない子どももいます。サタスタでは今年から、地域の方で英語の授業をとり入れました。授業というよりはゲームです。昨年まではトライのアドバイザーに来てもらっていました。算数がメインですが、その2時間、子どもたちがなかなか集中できないので、最初に100ます計算を入れて50分。休憩の後、後半は漢字の書き取りを5分ほど入れて…といった形から始まりました。今年度からトライさんが抜けましたので、小学校のゲ

ーム感覚の英語科をとり入れてみました。その後は宿題、授業の予習・復習、家にある問題集、基本的には何をしてもいい。朝の2時間の中で、とにかく机に向かう環境を整えましょうということを進めています。参加の募集をかけても、乗ってくる子どもたちは少ないのですが、募集してきた子どもたちはほぼ参加しています。これがちょっと自慢できることかなと思います。15人程度の参加人数ですが、自分たちの家庭の事情や習い事がない限りは、ほとんどの子どもたちが来ています。逆を返せばサスタは、自分たちでも行こうと思う子でないと続かないところが問題点です。だからそれを学力につなげて…となったら難しいかなと思います。一定レベル以上の子の学力を上げるという点に着目すると、サスタは効果があると思います。場を提供するという意味ではまなび舎ですが、プラスアルファの学力をと考えた時には、まなび舎よりサスタかなと思います。

まなび舎に関しては、これも授業の後の時間は、なかなか集中できません。基本的に宿題をするので、学習アドバイザー云々にこだわらなくても、人は集めやすいと思います。宿題をしない子もいるというのを聞いています。実際に子どもたちを見ていますが、プリントをぐちゃぐちゃになっている子もいて、消してはやり消してはやりして…、根くらべですね。でもそこに来て2枚あるプリントのうちの1枚だけでもするのであれば、これは週1回ではなくて回数を増やせば、子どもの学力や習慣には繋がるのかなあとと思います。

まなび舎 Kids を最初に始めた時に、門真の子どもたちの学力を…というところから私も入りました。私の校区は地域行事が多いので、自分もPTAの役員をしながら、PTAに声をかけてきてもらうということに、一步引いてしまうところがあります。子育てが終わった方、地域の方、同じPTAの方で役をしていない人たちに、「ちょっと、きて」と声かけをしています。サスタに関しては、勉強を見ないといけないうい感じがあるのですが、まなび舎に関しては、とにかく小学生レベルの宿題が見られればよいので、学生、保護者などに声かけやすいです。まなび舎は他の方たちも入ってきやすいのかな、というのは反応としてあります。

宿題は、計算ドリルや漢字ドリルがほとんどで、子どもにとって事務作業的になっています。しかし、その算数のドリルすら解けない子もおり、「授業では何をしているのだろう。1時間座ったままかな。」と思うこともあります。週1回見ているだけでも、「この子、ついていけないな」とわかるということは、担任の先生ならもっとわかりますよね。まなび舎に行く子どもで、苦手な部分がある場合には、過去のプリントでもいいので、「1枚だけでいいから、やっておいで。」と渡してくれると、それを多少なりともフォローできるくらいの受け皿はあります。毎回先生たちに出てきてほしいとは言いません。そういう連携がとれると学力に本当につながってくるのかな、と思いました。ちょっとした気配りをして、みんなで連携すれば、学力を底上げすることができるのかなと思っています。

委員：私も発足当時から、サスタの事業にかかわらせていただいています。サスタを始めた時には、4、5年生を対象にした土曜日の学習ということでやらせていただきました。小さい小学校だったので、参加者は15人程度でしたが、本当に勉強がしたいと思ってやっ

てくる子どもが多かったです。特に中学受験を考えているお子さんが多くて、初日に赤本を持ってくる子もいました。私も勉強しないと子ども達にはついていけない、というレベルの勉強をさせてもらっていたのです。そういう面では、サタスタは、本当にやる気の出るお子さんには、とてもいい事業なのではないかなと思いました。

今回、中学校の方でサタスタに入らせていただいています。中学生になりますと、こちらもついていくのに必死で、子どもが勉強をしているところを、私も予習していくのです。子どもの質問になるべく答えられるようにしています。わからない問題があったら、先生に「これどうやって教えたらいいのですか。」と直接聞いています。それをなるべく子どもに教えるように頑張っています。中には授業についていけない子どもがいるのですね。先生も気になっているのでしょう。サタスタには土曜日ですけれども、みに来てくれます。「今日はやんちゃな子ども達に来るから、私も見させてください。」と言ってついてくれて、「私は数学担当なので…」とずっと教えてくれていました。そして、その子ども達に、「またおいでや」と声をかけていました。こうしたことも学力向上につながるのではないかなと思いました。

学校の宿題についてですが、うちの子は塾や習い事をさせているので、学校でたくさん宿題が出された時には、朝学校へ行く前に宿題をしています。時間に余裕がなく、朝6時に起きて1時間宿題をやって、急いでご飯を食べていく、というようなことになります。塾に行かせている親にすれば、学校と塾からたくさん宿題を出されるので厳しいよね、という話になってきますね。

委員長：家庭学習の問題は、考えるとまだまだ意見たくさん出るのではないかと思います。門真の学校と保護者とPTAと地域の連携について、今までやってきたことを基盤にして、バージョンアップしていく必要があるということ、皆さんおっしゃっていたのではないかと思います。

1つは、門真市全体として強いメッセージを出すというお話がありました。宿題の意義や学び方を、市として、学校として、それぞれ伝えきっていくということです。強いメッセージとして、学び方はどうしたらよいのか、宿題はなぜ大事なのか。そして、宿題はこんなふうにしていこうということです。委員の方からはスタンダードというお話も出ましたが、そういった形でメッセージを出していくということが大切なのではないかなということだと思います。

それから、学校での宿題の在り方が、委員の方から依存するようなものでいいのかというお話もありましたが、やはりちょっと戦略的にしていく。習慣づけをすることから始めて、より学力が高まるようなものにしてほしいとかいうもそういうことも含めて、ばらばらではなくて足並みをそろえていく。形も大事なんじゃないかと話がでてきたと思います。その足並みがそろっているということ自体が、保護者の皆さんにとっては、学校とどう関わっていったらいいかということもわかりやすくなっていくわけですね。そういう宿題のあり方が、そういう1つのあり方を考えていくことが今後大事だという話が出てきたので

はないでしょうか。

それから、宿題がなかなかできていない子どもに対するセーフティーネットについてもお話が出てきました。これは家庭自体が学ぶ環境として、いいものになっていく。ふさわしいものになっていくという方向性もあります。サスタ、まなび舎 Kids や、放課後児童クラブなどが、学校でもない家庭でもない。しかし、そういうことができる場、時間を確保してその中で子どもたちの宿題をみていく。習慣づけを含めて、宿題をやっていく機会を与えていくという話が出てきました。このようなことが、門真の子どもたちの学力の向上にとって、必須なのではないかということをおっしゃったというふうに思います。

委員：言おうかどうかずっと悩んでいたのですが…。家庭教育の話をしているはずなのに、学ぶ場が学校になってきているのだな、そういう社会情勢や状況もあるのだなと思いました。一生懸命な家庭は多いと思うのです。共働きの家庭であるとか、生きるために必死であるとか、そこまで手を差し伸べられない親の気持ちは、私は担任をやってきて、痛いほどわかっています。そこを詰め過ぎて、関係が悪くなっている担任と保護者を見てきています。そのあたりを考えると、やはり地域力ですね。PTAだけではなくて、地域から誘ってもらっている。目の前のことに必死になっている保護者が、子どものことも少しずつ見ていけるような場をつくってもらうことが、プラスになっていくのではないかと思います。宿題はやるものだ、という前提になると、少し厳しいかなと思います。そういうふうなところから地域ぐるみで子どもたちを見ていけるところが、できていけばいいなあ、と思います

委員長：そうですね。どんな手段があるのか、どうすればそれが可能になるのかを知りたがっている保護者もたくさんいるのではないかと思います。こんな方法もありますよということが、地域の中や学校とのコミュニケーション中のびったりくれば、じゃあやってみようかなというようになってくるのかもしれないですね。

委員：これは私のこだわりでもあるのですが、今、いろんな教育方法があると思うのです。理解の早い子からゆっくりの子どもまで、全員を視野に入れた授業に取り組んでいる先生もいると思うのです。そういう先生方は、宿題などの課題も同じようにしているのかなと思います。全員を見ていける、そうありたいと思いました。宿題のいいさせ方、出し方が、私はわからないのです。私も夏休みの宿題として自分でも勉強しますが、市教委の方からも教えていただきたいと思います。

委員：それは、教員代表で来ている者でやらないといけないのではないのでしょうか。小学校ではこうしよう、中学校ではこうしようと、考えられたらいいですね。

副委員長：それは、きっと現場に沢山うずもれていると思うので、引っ張り出してほしいですね。今の発言にもあったように、学校教育があって、家庭教育があって、そして子どもが学校で保護者の皆さんや地域の人にサポートされて、という考え方があるのですが、実は本来は、子どもの社会教育なので、場所にはこだわらないというのが今の事業なのです。例えば、土曜寺子屋をやっている東京のある学校は、朝8時から10時まで勉強で、その後クラブ

をしています。千葉県の習志野や、色々なところで子どもの社会教育が大変ユニークで発達しているところがあります。それは事務局でチェックをかけるなど、何かすれば、本当にいいものが見えると思います。愛知、千葉、東京の三鷹市なども、そのあたりはかなり発達しています。一度調べて、必要であれば、見に行けばいいと思います。

委員長：いずれにしても、研究課題は具体化してきたなと思います。そろそろ時間になりました。本日は、お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございました。次回は8月28日の午後3時、消費生活センターで行いますので、よろしく願いいたします。
以上で委員会を終わります。